

79 これもまた、「教育協働」の未来を引き寄せるもの?!だが、ちょっと待てよ?!

堂本 彰夫

(1) ここにも?トップリダーがいた!世の中は、本当に動いている?!

そんな中、たまたまネット記事を眺めていたら、ある意味信じられない?見出しが踊っていた!「岐阜市に『不登校児専門公立中』開校。除幕式で会場を涙させた京大准教授のスピーチ」とあった!最初、マスコミの過剰報道?による胡散臭さも感じさせられたが、本文を読み進めてみると、そこに、同市のH教育長という人の、まさにトップリダーとしての識見と実行力が、鋭く発揮されていることが分かった!ちなみに、その学校とは、岐阜市立草間中学校であり、この4月7日に、「不登校児専門中学校」として開校されるということである!

しかるに、記事によると、同中学校は、「自治体主導」としては、初の「公立不登校特例校」で、説明会には、40名定員のところ、120家族、実に380名が参加したということである。そして、その運営方針は、驚くなかれ、「すべての授業はオンラインも併用のため通学してもしなくてもOK」、「担任教師は生徒側の選択制」、「時間割は教師と生徒が相談しながら一緒に決める」(義務教育としてはきわめて異例)、「職員室は生徒に開放する、生徒は食事をしていただくつらいでもよい」、「開校時の先生は異動でなく手上げ方式」といった、通常の公立中学校と比べると、「実に革新的なものだ」ということである。世の中は、本当に動いているものである?!

そして、その次の記事では、同校が、開校に先立って3月27日に行った開校除幕式・内覧会での、京都大学総合博物館准教授のK氏が行ったスピーチが話題を呼んでいるということであった!「好きになったことを突き詰めると、その先に分からないことがあっても、さらに知りたいと思えるのです。その瞬間こそが、まさに勉強したいと思う瞬間で、このときに学校の先生が戻ってくると、以前と同じ算数の授業をしたとしても、子どもたちの食いつき方が違ってきます。そのような瞬間こそが、子どもたちにとっての学びの場なのです。半信半疑だった市長も親御さんも、変化した子どもたちの姿を信じて、バーバパパの学校に子どもたちを預けたい、と思うようになります。こんな学校こそが、もしかすると理想の学校かも知れない。それが、私がH教育長にお話ししたことです。ここで大切なことは、子どもたち自身が学びを選ぶということです。」とあった!

私は、このK氏や、彼が推奨したという「バーバパパのがっこう」(絵本名)については、まったく知らなかったのであるが、実は、その絵本は、今流行りの?「選択の多様性」をモチーフとするもので、教育界をはじめ、多くの人々の共感を得ているということであった(※「バーバパパ」とは、フランスとアメリカの絵本作家夫妻の絵本に登場するキャラクターの名前で、その「バーバパパ」を主人公とした絵本が、今、世界中で話題になっているとのこと!余計なことであるが、私は、恥ずかしながら?、最初、彼?は、「おばあちゃんパパ?」かと思った?笑)!

そこで、このK氏のスピーチであるが、「これはフランスの小学校のお話なんですけれども、学級崩壊が起きそうなときに、親御さんや市長さんが、『おまわりさんをつけてでもいいので、学校にしばらくつけて勉強をさせないといけない』と言いだすところからスタートします。それを見かねたバーバパパが、皆を森の学校へ連れ出します。バーバパパには個性豊かな家族がいるので、子どもたちの好きなことに合わせて、いろんなことを教えることができます。歌を歌うのが好きな子ども、自然観察が好きな子ども、機械いじりが好きな子ども、みんなそれぞれ夢中になるものが違います。」とあった。

(2) 重要なのは「学びの選択肢がたくさんある」こと?!確かにそうだが、それを、学校だけが担うのか?

さらに、ここでは、すべてを転載するようで恐縮であるが、「私が、世界中、それから日本中、理想的な学校がどういうところなのかというのを調べる中で、魅力的な学校に共通すると感じるがあります。それは、『学びの選択肢がたくさんある』ことです。好きな場所で学ぶことができたり、好きなことを学ぶことができたり、学ぶ内容を選べたり、さらには学びの設計図である『時間割』を先生と一緒につくることのできる学校こそが、子どもたちにとって本当によい学校なのではないか、と思うようになりました。しかし、子どもたちがこれを選ぶというのはなかなか難しく、しかも、そういう環境はほとんどありません。大人は、時間割も、教室も、担任の先生も、9教科も、よかれと思って子どもたちに与えます。子どもたちに必要だと思うから与えるのです。」とあった!

まったくその通りである!しかも、続けて、「でもこれを子どもたち自身が自分で選べるチャンスというのは、どうすれば作ることができるのか。みんな同じように同じペースで学ばないといけない、これができることが、大人になるために必要だと大人は考えます。そのためには我慢をしないとけないし、耐えなければならない。しかし、本当にそうでしょうか。我慢して、耐えることだけが、子どもたちに必要なことで、これを6・3・3の12年間、さらに4年間足して16年間耐え続けられた人だけが大人になれるのでしょうか。いま学校現場は、たくさんのことを要求されています。グローバル人材、スーパーサイエンス、SDGsさらにプログラミング。これを全部できたら、スーパーマンにしかならないですね。そんな大人は町の中に何人いるのでしょうか。」とあった。これもまた、まったくその通りである!

そして、さらに続いている。「そんな大人が見当たらないにも関わらず、なぜかみな、学校に、たくさんのご要望を要求してしまいます。すべてを学校にやらせすぎな気がします。学校がやるべきことは、子どもたちの学びの機会を奪わないことです。子どもたちが学びたいと思ったときに、学べるような環境を用意することだけが唯一、学校に課せられた使命です。学びを嫌いにさせるのはもつてのほか、絶望しそうになったときに学びを諦めない、そんな子どもたちに育つ場所が学校なのだと思います。そういう意味で、この草潤中学校は、子どもたちにとっての学びを守る、当たり前だけれども、それでいてすごく難しいことに挑戦してくださっている、すごい学校だと思います。これが北欧やシンガポールのような教育先進国でもなく、日本の真ん中にある岐阜市の自治体で作った公立の学校ということが、もっとも重要なことだと思っています。」

そして、最後に、「公立でこれが実現できるということは、ここが特別な学校ではなく、本当に誰でもどの地域にでも、すべての子どもたちが受ける権利を守る学校の在り方が示されたと思っています。この学校がチャレンジすることに対しては、まだ戸惑いもあるし、すぐ結果が出るかはわかりません。しかし、ぜひ温かく見守っていただきまして、ここで育った子どもたちが、本当に学ぶことが大事であるということをもつて言えるような時間をぜひ待ってあげていただきたいと思います。「待つ」ということが大事だと思うので、ぜひ皆さんもご協力いただけたらと思います。」と締めくくられていた。

(3) ただし、この取り組みで、すべての学校が救われるわけではない!!

以上が、K氏のスピーチであったようであるが、ここで、ふと思い出したことがある! すなわち、こうした論調は、以前にもどこかで出くわしたような気がするのであるが、それは、確か、『「学校」をつくり直す』というタイトルの本であったように思う?! これまでの学校教育(義務教育)が、まさに「みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方で」やってきたという、まさに、その「システム自体」に問題があるというようなことであった?! 私に言わせれば、ある意味「保護(ケア)という名の囲い込み?」ということでもあるが(しかし、それは、決して悪いことではない!むしろ、ある時期までの子ども達にとっては必要なこと!),そこにおける「負の部分?」が、改めて問われているということであった(本シリーズ34)!!

ただし、このような取り組みは、たとえ公立ではあっても、ある一部?の子ども達は救えるが(緊急的には、それも必要であるが!),他の多くの?子ども達は救えない?ということである!!一応?後者は、それほどまでには問題はないので、それはそれでよいということかもしれないが、「学びの選択肢が多くある」ことは、まさしく、すべての子ども達にとって必要なのではないか?彼らとて、その選択肢の少なさ(なさ?)で、満足しているわけでは決してないのである(我慢している?ただ単に気づいていないだけ?)!!さらに言えば、適応していない子ども達だけが(多少誤解を招くかもしれないが?),正当(可哀想?)であるわけでは決してないのである(もちろん、病気とか、いじめとか、さらには貧困とか、家庭不和とか、様々な外的状況があることはあろうが?)!!

ならば、どうするか?答えは一つしかない!!要は、すべての子ども達が、自らに必要な「多様な選択肢」を得ることができるようにしくみを創ることである!もちろん、可能な限りではあるが(漸進的に!),そのためには、一つの学校だけの変革(新設)ではなく、他の学校や、その他の教育機関や場所(社会教育も含めて!)の抜本的な改革が必要なのである?!つまり、それは、学校だけの改革では実現できないのである(学校だけで、そうした任務を担うことは、事実上無理であるし、危険でさえある?!)!それが、最近またよくいわれる「学校、家庭、地域の連携・協力(協働)」の目指すところということであるが、それを、着実に?実現させていくのが、教育協働(「学校教育」と「社会教育」の協働→現状では、現行の「地域学校協働活動」に相当!)の考え方やしきづくりだということである(要は、従来からの、スローガンだけの?取り組みでは何も生まれない?という意味である!)!

ということで、ここでは最後となるが、先の「教育協働への道77」でも書いたように、政策トップリーダーの実行力(英断?)というものが、今こそ是非とも必要であるということであり、今回の、この岐阜市立草潤中学校の事例は、まさに、その典型例であるということである!そして、しかも、ここでは、私が、先の第22回の「教育協働セミナー」で実感(再確認?)したように、そのような画期的な(意義深い)取り組みが、どのようにして生まれてきた(くる)のか?そして、それに関係した人間(当事者達)、及びその人達の思い(哲学?)はどのようなものであった(る)のか?あるいは、そこに、どのような推進(逆に阻害?)要因があった(る)のか?ということが、明確に示されているということである!!

ただし、そうした折角のチャレンジ(変革)やしきづくりであっても、まだまだ学校教育だけの枠組み、視点からのそれであったり、本当は、それを越えたものであるにも拘わらず、当事者達が、残念ながら?そのことに気がついていない?!それであったりというようなことが、まだまだ多いということでもある?!そういう中で、今、「総合教育行政」ということが叫ばれ、新たな「学校教育(行政)と社会教育(行政)の協働」の形が創られ始めようとしているが、これからは、そうした新たな「しくみ」のもつ意味の発見と具体的な「しくみづくり」を、当事者達がいかに行っていくのか?そこに、政策トップリーダー(とりわけ教育長!)の、さらなる識見と実行力(英断?)が求められるのである?!そうでなければ、真に有効な「教育協働(地域学校協働活動)」なんて実現できない?!借物か、既存のものへの粉飾を、流行り(or指示)に従って行っていただけとなる?!